

—— 同朋会運動を生きてきた北海道教区の人たち ——

第2回 中岡 明秀 氏 (第5組敬徳寺住職)



—— 今日はお忙しいところお時間をとっていただきまして、誠にありがとうございます。前回の第4期教化本部の黒萩本部長の時代に「本部発足の願いに聞く」と題して、中岡先生を交えてお話しされた座談会の内容を拝見させていただきました。また教区の本部通信の中で、同朋会運動の検証や北海道教区の動きと全国の宗門の同朋会運動の検証を、前期までの教化本部の中でもやっていただきました。具体的に御遠忌を迎えそして終えた中、今の教区の中で何が課題かということと、具体的に今の教化本部の中で今後どういう教化事業を近年と将来的に、考えていけばいいかという様なことを含めまして模索しているところであります。

このたび伺わせていただきましたのは、若い僧侶が、同朋会運動という言葉だけは聞いておりますけれども、自分がおあずかりさせていただいている自坊でどういふことをやっていくということが一つの同朋会運動ということの中身なんだろうかということもたぶん、感覚として全くない、手探りすら出来ないような状況の感覚であろうという風に思っているんです。ですから、同朋会運動発足当初から関わられた先生のお話しを直接聞かせていただきながら、発足当時の様々な状況や、今の我々教区の一人一人に対するメッセージというか、そういうところまでお話ししていただければということですので今日は寄せていただいたということでもあります。よろしくお願いします。

まず、同朋会運動の具体的事例ということで、先生がご自坊でご法務を始められた当時の頃の、ご自坊や周囲のお寺の雰囲気、僧侶としての志しはどのようなものだったのでしょうか。また、その当時における先生の教区・宗門に対する思いはどのようなものだったのでしょうか。

どのような意識かは別として御門徒には、自分のお寺という意識は御門徒の多くは感じておりましたね。具体的にいいますとね、屋根雪おろし等も自分たちでやらねばと率先してやってくれましたね。また、今も続いておりますが、宗祖御命日法要のお講当番、参詣者のお齋を用意するんですが、当番組の人は世話人さんを中心として、朝から準備して後片付けをして法座に参って帰るといふ……。ところがね、何故か当番の時は来るが、他の法座には全く来ない方が半数以上はいるという……。奉仕活動もお参りにも参加してお寺との関わりは深いが、その根底はなんだったんでしょうかね。住職の務めも、法務と法座のときの法話だというように思っておりました。50年程前のことですが。

—— 御命日の法座は大半のお寺が務められていましたか？

地域によってはかなりの違いはあるんですが、北陸等真宗の宗風の強いところから移住してきた地域のお寺においてはほとんど、御命日法座は務められていたと思われまふ。少なくとも、北空知の農村寺院においては、参詣者の多少違いはあっても……。

—— 御命日の法座などの法座とは別なかたちで、何故同朋会運動がおこってきたのでしょうか？

そのような状況の中で、何故同朋会運動がおこったということですね。それは危機意識だと思ふんですよ。私に危機意識があるかどうか考えてみましょうか。以前流行った言葉に「お寺は風景画に過ぎない」という言葉がありましたね。これをどう受けとめますかね。直感的に。

次にあげる事のどれかに、自分の境地はあるのでしょうか。

- ・ 適切な表現だ。お説教に使わせてもらおう。
- ・ そういうお寺の住職は多いよなあ。俺たちも迷惑する。
- ・ 私のお寺は法座の数も御門徒の参詣の数も多い。あの言葉は無縁だな。
- ・ あの人は縁がなかったんだねえ。宗門の〇〇先生のところに行っていたら、あんな言葉は吐かなかったろうに。
- ・ あの人がオウムに走ったのは、大衆の苦悩に応える念仏の教団といいながら、その門は閉ざされていたのだ。自分の生涯の課題として、あの人と共に救われていく道を念仏の歩みに問い続けよう。

自分の境地はどれでしょうか。考えて答えをだすのならすぐわかるでしょう。

最初の4つと最後はものを見る方向が違います。最初の4つは自分の世界からものを見る、あくまでも他人事なんです。私たちはここを出る事はないでしょう。最後はその事を通して自分が問題になっているんです。つまり、「風景画」は自分のお寺であったと知らされた驚きと悲しみでしょう。しかし、どう逆立ちしてみても自分からはできませんよね。せいぜ

い苦笑するぐらいのものです。自分に驚きと悲しみの心を知らせてくださったもの、これが仏願の歩みでしょう。そして、私からでははずもない歩みがはじまった。この譬えからいえば「風景画」の自覚こそ危機意識なんです。

話しは前後するかもしれませんが、北海道教区に訓覇先生と蓬茨先生それから釜石の渡辺先生、この方は地元で門徒に限らず人々とお念仏の教えを語り合っておられる実践者として……。同朋会運動の願いを伝えるためおこしになられました。ところが話しが噛み合ないんですよ。先生方とお話を聞いている私たちと。先ほどお話した事でおわかりでしょう。方向が違うんですから。で、蓬茨先生がこんな事を話された事を鮮明に覚えています。「まあ、こうやっているけれども、そのうちに本山も根をあげてやめるだろうと思っているかもしれませんが、これは絶対にやめません。」と、ちょっと笑って。あの先生独特の表現ですけれどもね。当時は見透かされていると思っていましたが、今感じる事は、たとえ不毛の大地であっても、種を蒔き続けるという意欲が響いてきますね。これは仏願にうながされて起った教団の現実を悲嘆する危機意識、そして歩みを生み出すのでしょうか。「不請之友」という言葉がありましたが、あなたが目覚めるまで語り続けるという……。

現実的にはお寺の御座が、念仏者を生み出さなくなった危機意識だと思うんですよ。28日にはお参りはしていると、しかし、本当にそこからお念仏に生きる人がうまれてきているか、と問いかけられているんですね。今でも私には参詣が少なくなった、何とかしなければということはあるけれども、念仏に生きる人が生まれてこないということはあまり問題にならないという……。まあ住職同士で話してもそういうことですね。だから、同朋会運動は私たちに永遠の課題として、お前の身をおいてお寺は念仏者を生み出しているか、あなたはどうかと問いかけてきているんです。

それからもう一つ、教学が現代人の苦悩に答えていないというか、応えられなくなったという問題ですね。同朋会運動が一応曲がりなりにも理解されている今日、「風景画にすぎない」という批判をうける。これは「お寺はいのちを失った」といわれているんですね。当時はお参りを誘っても、ご門徒から「死んでから、極楽の話だから聞かなくていい」とよく言われましたよ。幕藩体制の中で生きてきた教団の教学、説教が今、未だ尾を引いているという事実。また、法話も大衆に人気の話がうけるという、これもよく「昔はお寺しか行く所がなかった。今は楽しむ所がたくさんある。」という御門徒さんの言葉からもよくわかりますね。

この事は宗門内でいえば、宗祖を見失っているという危機意識ですね。当時、研修会等で真宗聖典を持ってくる方は極く稀でしたよ。私も持って行ってなかったですね。今日まで、教区そして数多くの研修会に「親鸞に遇おう」というテーマが掲げられているけれども、何処で会うのでしょうかね。宗祖の生涯かけて私たちに残してくださったお言葉を聞くことじゃないですかね。それなのに「真宗聖典」を持ち歩かないとは……。このことを生涯私たちに呼びかけてくださったのは宮城先生ですね。今「真宗聖典」を持たない学習会の参加者はいないですよ。また、テーマも「親鸞に遇おう」と。これで宗祖を見失っ

ている目は自覚され、確かな歩みとなっているといえるのでしょうか。一人ひとりがお考えいただければと思います。まとめていえば、危機意識とは純度 100%の目でみた教団の現実でしょう。

—— 同朋会運動を提唱した人は当初少数派なんですか？

私たちの目は純度何%なんですかね。私見と私心がはいっているのでしょうか。私見と私心しかない人の上に純度 100%の危機意識が生まれたというべきでしょう。だから、感じとった少数の人が呼びかけたんです。

危機意識が本物であるかどうかは、そこから歩みが始まるかどうかということですね。まあ、先ほど譬えとして出した「不毛の地に種を蒔くような」。その頃、私は未だ学生でしたから、事実に触れていないのですが。本山の伝研とか伝講という形で、当時の若い僧に語りかけたのでしょうか。それは折伏じゃない。一人ひとりの目覚めを促すような……。もし、私見個人的見解や私心、この事を利用して、というようなものが感じたらついていかなかったんじゃないかと。

—— 先生はその当時おいくつですか？

だいたい大学を卒業してきた頃ですからね。23か24才ぐらいのそういう頃に、今、お話ししてきた様な事と出遇いました。あるいは、法務もどう勤めていいのかわからないと云う事で、東旭川の加藤真さんのところに声明を習いに行って、声明だけでなく、教学やお寺の在り方を学ばせていただきました。又、隣に山本良超先生がおられましたし、同朋会運動の願いは肌で感じさせられていました。唯、自分の中に危機意識がおこると云う事はなかったですね。

念仏に生きる人を生み出さない法座と法話。しかもですよ、そのことで十分に法座が開かれ、お念仏の教えが伝えられていると感じている住職や門徒の意識に問いかけたのが特伝（特別伝道）でしょう。これは同朋会運動の一つの柱だったと思います。だから、まず法座と法話が問われたんでしょう。一寸思い出したんですが、その頃報恩講に見えられました布教使さんがねえ、「わしは、人に受ける話を45席（45の法話）を持っている。一週間の布教でも、21席あれば良い。まあ、3年目になれば大体聞いている方は忘れている。何年呼ばれても心配はない。」極端かも知れませんがね。根は同じですよ。だから、講師もスタッフも参加者も共にお念仏の教えに聞いていく法座が具体化されたのが特伝だったと思います。そこで座談が取り入れられてきたのでしょうか。宗祖と同行の間にも「こんな私でも助かるのでしょうか、お念仏一つで」同行の一言一言にうなずきながら、語り合っていたんじゃないかと。そんな所に源流を求めたんじゃないかと感じていますね。ところがやはり私見が入ると純度が薄れる。蓮如上人の御文に「それ八万の法蔵を知ると

も、後世を知らざるものを愚者とす」と、まあ、信心を語り合ったものが、どれだけ教理を知っているかで人を見る様になる。必ず形骸化してくるんですね。蓮如上人の危機意識を表す言葉ですね。法義の厚い所では御示談と云うのが最近まであったようですが、教義の話で自分の信心は語られないようになったと、聞いたことがあります。その時の問題を見据えながら、特伝のカリキュラムが作られていったのではないかと・・・。

まあ、しかしねえ。今度は集まった人と、講師やスタッフの間の溝が大きいんですよ。で、なるべく若い人を連れて行ってくれということで、2人やっとの思いで連れて行ったんですけどもね。そうしたら一番若かったからか、座談の時に司会者が最初に質問したんですよ。そうしたら、あとで「おらあ、もう行かんって言う。」私も虎の子の二人を失って、これは何のための研修会かと不満でしたね。暫くして加藤さんが蓬茨先生に遇わせて下さいました。先生にこの事を愚痴ったら蓬茨先生は、「それでいいですよ。講師の信心が問題なんです。それから、あなたの描いていた特伝と、特伝の願いが違っていたんです。ただ、それだけなんです。」と穏和な顔で話しかけて下さいましたね。その時、私には何というたよりない、分からない答えなんだろうと思いましたがね。ただ、同朋会運動に深く関わる様になってから、この先生の御言葉がいつも私に呼びかけられているんです。大半のお寺は組、あるいは本山の事業だからと云う事で参加したんじゃないかと・・・。

—— 先生が帰ってこられました当時、同朋会運動が始まるという形で北海道教区に対して、訓覇先生・蓬茨先生・渡辺先生が来られて説明される中で、現場の住職さんはその当時年配の方が多いと思うんですけど、それに対する違和感みたいなものも多分たくさんあったんでしょうね。で、先生ご自身はそういうものにすなりこう、反応できたというか。受け入れられることが当時出来たんですか？ 感覚としては。

まあ、面倒な事をやらなきゃならんという意識が、内面に強くありましたね。

—— 先ほどの危機意識を感じる人は危機意識持つけれども、感じる事が出来ない人はもちろん危機意識がないわけですよ。で、たとえば同朋会運動を提唱していこうとされる人達は、その危機意識を表現する形でこういう運動を提唱されていけますよね。で、一方それを受け、現状に疑問をもたれない感覚の人はいわゆる危機意識を共有できませんよね。たとえば今の現状の中でもお寺に戻られた若さんなどが、ある程度経験積まれた先輩方に今こういう課題があるといわれてもぴんとこない、いうことが多いと思うんですよ。そういう中でたとえば先生が若い20代の頃に、お寺に帰ってこられた中で、周りの先輩から特伝やりましょうという形で促されて、実際にすぐ動きになったんでしょうか？

あの頃第5組では、専光寺・願成寺・光台寺・安楽寺の前住さんが意欲的に取り組みま

してね。まあ、それについていったと云う……。特に専光寺の前住さんには大きなお導きをいただきましたね。専光寺に同朋会運動の先駆者がよく、お見えになられましたね。訓覇先生・高木宏夫先生・高史明先生等、そういう先生が来るたび、夕食に誘って下さるんです。講義もありませんしね。でも、先生等の生きている姿に触れることが出来ましてね。高先生は、いつも自分を念仏に問うているというか。何も分からない私にも、問いと共感を求める相というか……。まあ、この人達は生きる世界を持っている。ついていっても決してうらぎらないと感じましたね。

—— それらの動きは、ある程度北海道の中では受け入れられていったもんなんですか？

特伝は各組、行われたと思います。受けとめは様々だと思いますが。

—— 特伝は年に1回ですか、複数回ですか？

何回でしたかね。年3回じゃなかったかと思います。今なら当然の事になっている講義と話し合い、こういう形での聞法の在り方には一寸戸惑う人が多かったですね。

—— 特伝は一ヶ寺一ヶ寺の開催ですか？

いや、何ヶ寺かでブロックですね。5組でやっていたのは4ヶ寺、5ブロックじゃなかったかと。そして講師は高岡教区の笠原保寿先生ですね。それから中田駐在がご一緒に来しました。

—— そういう中でどういう感覚だったんですか？特伝に参加されて。御門徒さんに声かけて一緒に参加されるということを20代30代ぐらいの頃に関わるわけですね。

うーん、やっぱり問題はねえー。自分が聴聞するっていうよりも……。先程話しました様な事がありますから、連れてった人がどれだけ受け止めて、又次回来てくれるだろうかという、そっちの方が気になる様な。そんな感じでずっと……。特伝はそんな感じで、各地のお寺に問いかけてきたんでしょうね。

問題はこの特伝がどの様な受けとめをされてきたのであろうか、と云う事ですね。同じ事をとらえても見方は大きく異なるんですよ。特伝はその趣旨に基づいて、全国各地で開かれてきた。御門徒も数多く参加して下さった。従来の方座との違いに多少の戸惑いはあったとしても、確実にその願いは浸透していった。特伝は講師やスタッフが分からない門徒に厳しく問うから、反発が強く残った。この様な事を行わなくても、従来の方座で十分だ。特伝によって、講師、スタッフと参加者の溝の深さは強く感じられた。これは宗門の

世俗化と云う事実を改めて知らされた。こんな中でも念仏に生きる人が生まれてきた事が何よりも有難いことだ。(誰でも御存知の方に、名古屋の亀井紘さんがおられる。参加する迄、お寺なんて私が生きる上で不用のものとしていた。しかし特伝に参加して、私が生きていく事を尋ねていくのが念仏の教えだと知らされた。その事が機縁となって、教えを聞き、伝える御仕事を各地でなさってこられた方です。) 皆さんはどの様な受けとめをされるでしょうか。お考えいただければと思います。

それともう一つの形は、前期・後期教習(推進員教習)と本廟奉仕ですね。これはやはり同朋会運動の柱になってますよね。まあ、教化企画は違うと云われるかも知れませんがね。各寺の本廟奉仕ですよ。その願いは宗祖の前で教えを聞いてきた宗風というか、歩みに参加しようよ、という呼び声を具体化したんじゃないかと……。まあ、これは今日迄生きた歩みとなっていると感じますよね。ただ、一ついえば、寺院奉仕団が大きく減少しているのは何故だろうかと……。

前期・後期教習に「現代の聖典」をテキストとして用いると云う事について、蓬茨先生からお聞かせいただきましたね。言葉としては何も残っていませんが、講師もスタッフも参加者と一緒に観経序分に聞いていくんだという様な事を感じた事が思い出されますよ。どこでかという、講師が聞く人とおっしゃられた。今なら誰でも教えられていることでしょうか、当時の自分には奇異に感じられましてね。講師は説く人じゃないかと。同朋会館に御縁をいただいて、奉仕団の参加者と語り合う中で、聞く人と云う事を教えていただいたと思います。それともう一つ、この事から教えられる事は、育成員の業として教化者意識はなくなるんだ。いつもこの事を自分に問いかえしなさい、と蓬茨先生から育成員の姿勢を語りかけられていますね。

「現代の聖典」については、文章そのものを解釈してお話ししても、恐らくそこからは何も出ないでしょう。残るのはお経が分かったという意識か、自分とは無縁の話だったと云う事でしょうね。そうじゃなくて、王舎城の悲劇を通してその人物の生き方(苦悩の大地とでも云えばいいんでしょうか)と絶望の中から、何を願ったのかを自分の上に尋ねなさいと。まあ、それが講師やスタッフの聞くということですよ。これも当時、上の空でしたね。生まれてからずっと、こういう推求や教育を受けておりませんから、難しいと言われるんですよね。まあ、土徳があるという地域ではこう云う事が生活の中に……。講師というよりも育成員に対する厳しい御指摘ですね。

この事を具体的にお話し下さったのは、宮城先生が最初来られた時に、こんなお話しをして下さいました。「現代の聖典」の手引き書、問題点を分担して作成しておられたんだと思いますが……。韋提希が夫と子の間で板挟みになって苦しんでいるという所を担当なさったと。何が問題か分からない。蓬茨先生に訊ねられたら、それは板挟みになって苦しんでいるのではないんだと。自分が両方にいい顔をしようとして苦しんでいる人間の本質を、自分の上に見つめなさい。そう云う事を宮城先生が、蓬茨先生から教えられたと云う事をお話し下さいました。(人間の本質と願望に生きている、と云う事を教典からどれだけ

聞き取れるか、これが難しい、まあ見えてこない事ですね。)そして、それを参加者と日常的な生活に尋ねていくという難しい仕事を講師やスタッフは担っているんですよ。

〈休憩〉

—— それではお話し再開させていただきたいんですけども、先ほどの推進員教習というお話をしていただきまして、「現代の聖典」のことですね。途中だったと思うんですが。

これは使いやすいと思うんですがね。使いやすいというのは、分かりやすいとか話しやすいと云う事じゃなくて、問題点が出されていると云う事で。宮城先生のお話の様に、当時の作成スタッフの方々の深く教典に聞いていった上で出された問題点ですから。講師やスタッフの聞いていく根拠が与えられているという意味で。難しいという意味なら、何をテキストにしても難しいんじゃないかと。

—— 先生が若い頃に「現代の聖典」の学習自体も同朋会運動と同時に始まった格好ですよ。特伝と本廟奉仕と推進員教習。「現代の聖典」をテキストとしながら推進員教習が行われる中で、参加者のみなさんは聞きやすく課題を共有する様な雰囲気だったんでしょうか？

19組の、養成講座に行きましたけれども、あそこでは皆さんとよく課題を共有した感じで会を持つ事が出来たと思いますね。それは当時の若手スタッフ、もう前住や住職になっていますがね。が、意欲的に取り組んでいると感じられました。自坊の課題や御門徒との触れ合いの中から参加者を呼びかけていかれたと云う事ですね。印象に残っているのは、美幌ブロックでは若い婦人の方でしたね。別のスタッフも悩みを抱えている人を中心に呼びかけたとか。だから、スタッフに参加者の抱えている課題が見えているんです。そして私と会を持つ一ヶ月程前に「現代の聖典」を読み、一緒に尋ねる。私も出していただいた事を、もう一度テキストに尋ねる。だから、座談の司会も問題を深める事が出来たブロックが多かったですね。特に修田さんの司会は抜群でした。さらに講師の原稿と参加者の声を、機関誌を作って送るといふ・・・まあ、その意欲には頭が下がりましたね。講師が誰でもいい研修が出来たのでないかと今、感じますね。講師、スタッフ、参加者が共に聞くと云う事が、会を生み出していったと感じています。そこで念仏に生きる人が誕生したか、どうかは問題ですが。

—— それは最近の養成講座に先生が行かれた時のお話ですか？

でも、もうだいぶ前ですけどね。今の住職達が若手スタッフでしたから。もう一つ感じる事は、元氏先生をはじめ、すごい住職がおられました。若手に自分たちで道を尋ねなさいと云う事ですかね。一切口を出さなかったですよ。

—— 同朋会運動発足当時はどうでしたか？

当時はねえ、難しかったですよ。参加者と一緒に聞いてましたが。講師の語る内容と、参加者の聞き方ズレが大きくて。当時だけじゃない、永遠の課題ですね。

—— 「現代の聖典」観経の序分ですよ。ある程度経典の中身を理解している中で聞くのと、まったく理解しない形で聞くのではだいぶ聞こえ方が違うことがありますよね。課題を共有するときに、経典の話し自体をどういう形でみんなと共有していくかとか、いろんな課題がたくさんある中で、推進員教習に参加される御門徒さんが聞かれるとやっぱり難しいねと感じる場合もありますし、若い育成員の方も難しいねと感じる時もありますよね。お話される講師によって、同じ話しをされても、聞く方がそんなに難しくないと感じられる時があるんですが、それは何の差なんですかね。

何でしょうね。法座は話す人と聞く人によって住持されているんですよ。蓬茨先生の御指摘のように話す人も聞く人なんだと。講師がどれだけ自分の問題を聞き得たかという・・・。聞き得た事を参加者の現実はどう尋ねていけるか。同じ講師であっても、その時々で聞き得た事が違いますから。参加者に受けとめられたり、遊離したりするんでしょうね。多くの先生からお聞かせいただいた事ですが、善導大師は韋提希になりきって観経を読んだと。まあ、私にはなりきる事は無理ですが、姿勢を学びたいですね。

もう一つ「難しい」という意味というか、内容は吟味して見る必要がありますね。講師の話がただ説明になったり、参加者と遊離していたら、これは全責任が講師にありますよね。ただ、仏の世界と云うか出世間の問題が私の世界、私のものさしに合わないから難しいといわれても、講師には何の責任もないというか、講師は十分に務めを果たしたんでしょう。仏法を自分の中に取り入れようとするとか、自分に合わせて聞こうとする参加者の問題ですね。

今、仏の世界を聞くという難しさですがね。繰り返しになりますが、宮城先生が蓬茨先生にお聞かせいただいた事で考えてみますとね。韋提希が夫と我が子の板挟みになって苦しんでいると云うのは、教典の中で誰にでも分かります。悲劇の主人公として見る訳ですね。私の中にもそんな事があるよね、というても何の問題も出ないでしょう。私の世界で教典を読んだというだけですね。小説と変わらない。仮に講師がこれだけの話をして終わった

としたら、何も話さなかったと同じでしょう。いくら分かりやすい話をしたといっても、そこからは仏に問うという問題は出ないですね。私なんか法話の時にここで終わる事がかなりありますよ。それに対しまして、両方にいい顔をしようという自我愛、さらに誰も分かってくれないという孤独と自己肯定。そして元の世界、平和な家庭に戻して欲しいという願望、そういう姿勢を生きている。今の自分を受けとめられないという、人間そのものの悲しみを聞く、という話しですと、難しい、あるいは受け入れられんといわれるかも知れませんよ。これは講師には責任ありません。どう語り続け、聞き続けるかという問いは与えられますが・・・。

—— 僕も今、組の推進員の担当で「現代の聖典」をテキストにしなが、講師の先生に来ていただいてアフター研修をしているんです。推進員の自主学習会として。で、先生の課題の表現の仕方によって、みんなの感じ方が違うんです。私の組は講師の先生の表現が参加者の皆さんと共有できているように思います。本山から優しい手引書まででてますが、多くの現場では、「現代の聖典」の課題を何か共有できていない、もどかしさみたいな。それが育成員の学びにおいて一つの問題だと思うんですけど。どうもしっくりこないことがあって。

やっぱりあの観経、「現代の聖典」を読むことですね。原文読んでそしてそこから感じられた事を課題とするんです。これならみんなと共有出来るというところ、もう一度掘り下げて、観経疏といっても難しいから先生方の講義の中や手引書から課題を聞くと云う事でしょう。講義に聞くと云ってもまず、善導の言葉に最初に触れる事が大事ですね。たとえ分からなくても。

—— 教学の研鑽と法話についてという話しにも関連するんですけども、教学を学ぶってということと、具体的にわれわれ一人ひとりがお寺で生活をし、法務を務めていくということと、お座を開いて聴聞していくということが、何かこうバラバラになっていかなないように意識しながらも、結果バラバラになっていくようなことが私にはあります。「現代の聖典」をテキストにしてみんなでこういろいろな課題を共有しようと、生活の課題を我々がその経典から教えられていくような場合に、そういうものを大事にしていこうとしながら、その場から離れていくような生活になっていくことが、今の私自身の生活の中であるような気がするんですけども、先生がお若い時とかはどうだったんでしょうか？

教学に学ぶと云う事と現実の生活が問われないと云う事は、常にあるんじゃないですか？その事自分の課題になるかどうかですね。若い頃といってもお寺に帰って来た頃は、ずっと話してきた通りで問題意識なんてなかったですね。自坊に同朋会が生まれ、そこで

話す事になって、初めて生活に聞く仏法ってどう云う事かと……。誰か思い出せませんが「教学に学ぶと云う事は、画家がアトリエに入ると同じ事だ。現実の問題はさておいて、残して下さった聖教にその人の歩みを聞く事だ。」学習会で聖教に聞くとは、そういう事なんでしょう。もう一つの現実の問題をかかえてアトリエに入ると云う事もあるんじゃないかと。いろんな日常の語り合いから、そこにどういう問題があり、どう応えているのかと。もしなかったら自利だけで終わると言う……。昨年11月に後期教習に往きまして、感話があたりましてね。

—— 先生が引率された奉仕団の方がですか？

ええ。その方がずっとTPPの話ばかりしてたんですよ。北海道から京都行くまでの間。そして、私が感話をやりますと自分で言い出したものですから、あっ、TPPの話をするんだなと思っていましたら、全くしないですよ。そして今回ここに来るべきかやめるべきか直前まで悩みました。仲間が都合が悪くなって自分一人になったし、そうすると秋の後片付けも気になってくる。今ここに来てみて、阿弥陀堂にドームがかかっているのを見ました。完成したらどんな姿で待っていてくれるのだろうか、体さえ丈夫ならその時また来たいと。そんな感話だったんですね。

で、後で何でTPPの話をしなかったの、と聞いたら、それを話したら3分間で終わらない、時間を大幅に超過するっていうんですよ。時間を超過すると云う事は、皆の大事な時間を独り占めする事になるんだっていうんですね。だから、やっぱり一緒に来ている人に聞いてもらいたい。しゃべるだけでは駄目なんだって。聞いてもらって一緒に尋ねてもらわなきゃならんのだって。まあ、同朋会でも普段そんな事聞いたことないんですけど、言っていましたね。心に響くものがありましたよ。

このような感動(あるいは悩み)をもって、現実の問題ですよ。アトリエに入るのでしょう。皆さんもいろんな世事の中よく来られ、そして出遇う事が出来ましたね、と共感ですね。もう一つ阿弥陀堂が完成したら、又来ようよという呼びかけがありますよね。三帰依と自ら僧に帰依したてまつるという言葉が浮かんできましてね。アトリエで描く絵ですね。今の話と僧伽と云う事と、考えて話したら、現実と教学が一つになるんじゃないですか。自分の法務や法座で御門徒と接する時、感じられる事がありますよね。

—— 僧伽というと、具体的には？

具体的にはそこに集まれる人という。その一人ひとりに意味ありという。願いに呼びおこされて来たんですよという。一人ひとりを大事にすると言う事は、この集まってこられた会を大事にするということなんでしょう。そして彼の言葉から出てこなかったんですが、青色青光・黄色黄光と云う皆、尊しと云う事を聞かせていただきました、そんな法話

を2ヶ月くらい自坊のいろんな会で話しておりました。

—— 先生のお寺では、推進員教習はいつ頃から。秋山さんお寺と一緒に、毎年行かれますよね。もうどれくらい前からなんですか？

えーとね。うちで最初に行くようになったのは、昭和40年頃ですかね。同朋会運動と云う事で周囲のお寺で何かと取り組んでいる声が聞こえてくる。危機意識があった訳ではないけれども、何かやらなきゃという単純な思いからですね。しかし、問題意識が見えないから、何をやっていいのかすら分からない。たまたま「北海真宗」に教区に教区の後期教習の募集を見たんです。2月でしたね。しかも50才以下なら助成金が出るという。総代さんに話したら、助成金が出るなら話もしやすい。お寺の予算の中からもいくらか出して、若い人に行ってもらおうや、と。まあまじめな住職に話したら怒られそうな動機ですね。2・3年2名ずつ後期教習を受けていただいたんです。まあ当時、よく行ってくれましたよね。で、それから3年ぐらい経ちまして、教区の推進員の研修に参加していたんですよ。その中の一人が。

—— 現在の「新生推進員の集い」のような研修会ですか？

新生じゃないですね。あの頃は、全体の推進員の会です。

—— 後期教習を終えられた人が集まる会があったんですね、当時。

そこで、中田駐在や広隆寺の推進員の方だと思うが、おたくでも、同朋の集まる会を作って下さい、とまあすすめられたというよりも、本人がうながされたんでしょうね。うちでも呼びかけてみるわ、この人ともう一人、会を作るといふか、呼びかけのうまい人がいましてね。当時農村は地域共同体がしっかりしていましたから、同年代の門徒の方々が、16組皆夫婦で会員になってくれたんです。50才以下の方が32名も、よく参加していただいたと感じていますよ。だから住職の力で出来た会ではない。まあ、住職の力で作った会なら、今まで続いているんじゃないかと……。

本廟奉仕には意味も分からぬまま参加して、同朋会運動の願いに押し出され、如来の働きが彼の上に顕れ、そして同じ道を歩んだ人に呼びかけられ、この地に一つのサンガが生み出されたと感じています。むかしある人に話したら、瓢箪から駒が出たようなものだと言われた事があるけれども、まあ、そういう見方は見方として……。

—— 推進員教習を通じて、推進員になられた方々は、お寺の中で同朋会を作っていくつというようなことが一つの仕事というようにして同朋会を作られたってことですか？

よね。たぶん。

そうですね。歩んでいる人の声に促されたんでしょうね。だから、会結成の時、会員は皆推進員となり本廟奉仕に参加しようと云う事が、一つの柱になりましてね。その時の彼の言葉が印象的でした。俺は口では表現できん。往ってくれ、必ず大きな感動があるからと。

—— その当時は先生は住職なられていたんですか？

そうですね。なっちはいましたけれども、法話は常に不安でした。

—— 同朋会は推進員の方が中心となり、御門徒さんに呼び掛けて。30人ぐらい集まれる形で毎月？

いや、毎月ではないですね。冬期間、農家ですからね。

—— 内容はどういう形で？

私が法話をしていました。特に改まった座談は持たなかったですが、坊守が料理講習をやって、その後のお齋というか、そういう席で自由に話すという……。そこから次回の法話の問題を考えていました。皆さん、時間を割いてきてくださっているという感覚がありましたから、私なりにお齋の時に聞いた事を問いとして深められましたね。

—— その当時、推進員の教習を受けられた方々は、今の推進員教習を受けられる方と比べてっていったらおかしいですけど、熱のおび方というか、受け止め方の感覚に違いはあるものなのでしょうか？

どうでしょうかね。やっぱりあれじゃないですかね。私達の見方に問題があるんじゃないですか。自坊から参加した方の上になくなるんじゃないという夢を見るんじゃないかと。無論、願いもありますかね。又、過去の推進員も理想化して見るという……。

まあ、失望するかも知れませんがね。ずっと本廟奉仕にご一緒させていただいてますがね。他に大きな影響を与える様な人、こちらが頭が下がる様な人は十年に一人ぐらい生まれますかね。しかし、その人達がお寺を念仏の場として住持していく。他の人は駄目かと云うとそうではない。仏法を聞くと云う今迄なかった目をいただき、法座に参ると云う事を教えられていると感じますね。まあ、自覚といいながら、どこかで洗脳的感覚になっているか、自分の期待度で見ているんじゃないかと。

—— 今、養成講座、本山指定も教区指定も、北海道教区のかかなりの組がやっています、うちの組なんかもそうですけど、やっぱり行っていただいた後のアフター研修をどう持つかってというような事と、それを受け止める我々一ヶ寺一ヶ寺の住職、若さん方の在り方ってというのが、どうもそのお寺によって温度差がありますよね。

やむを得ないじゃないですかね。危機意識の問題ですから。寺澤さんの所ではかなり昔から、自坊で後期教習をやっているんじゃないですか？

—— 御遠忌の時は休んでますけれども。なるべく行きたいなとは思っています。同朋会が40年代に結成された中で、先生が若い時には話さざるを得ないという状況の中でいろいろ問いを深められていったという事が、その後の歩みに繋がっていくということになるんでしょうか。御自坊から毎年、教区の後期教習になるべく人を出すようにと。

それから組でやるようになったんですよ。毎年行いましたがね。10年以上は続きましたかね。住職も積極的に参加して下さったし。当初は、私の所と願成寺さんと樹教寺さんで人数の見通しはついたんです。願成寺さんは根付いた聞法会がありまして、住職さんが非常に熱心でしたね。人数が足りないとお願いにいくと、私が何とかしますと御門徒に呼びかけて下さいました。樹教寺さんは私の所より早く同朋会が発足していましたから。

ところが10年以上続くと、参加者を募るのが大変になりましてね。いろいろ価値観の違い、見方の違いが大きくなりましてね。二年おきにするとか、時期が悪いとか、日数が長いからと云う事で行えなくなりましてね。

で、一年くらいたってから、光臺寺さんと一緒にやろうと云う事になったのですよ。まあ同じ農村寺院ですし、お寺と御門徒の接点が失われてきているという問題課題が共通していましたから。

ただ、組も三年に一度、又本廟奉仕が行えるようになりましてね。最初の組の本廟奉仕は、次に二つの本廟奉仕を生み出したと云えるんじゃないかと思いますね。

—— それは大体いつぐらいから？

えっとそれは、十何年になりますがね。

—— それから毎年ですよ。

毎年ですね。御遠忌の時は、休みましたがね。

—— 毎年後期教習を組んでいくとなると、一ヶ寺お預かりさせていただく身として、毎年日常の声かけとか、交わりってというのはどういう。大体どれくらいの人数で毎年？

光臺寺さんもそうですが、行く行かないは別として、御門徒の中にうちのお寺は本廟奉仕に毎年行くんだ、という空気がありますよね。往った人がお前も往ってこいと背中を押してくれているように感じています。中には座談会が大変だったからやめた方がいいと、陰で言っている声もありますね。両方ともお寺の年中行事になっています。両方で最低15名が目標です。一応8名ですかね。片方が集まらない時は、又、自分の寺でも呼びかけるという。まあ、共同責任ですね。住職、寺族も共に参加すると云う事で、皆さんと同じように参加費は出しています。

そうするとうちの場合、あそこのうち今度勧めたいと。おれも行ってきたから行こうと。で、一回行った人も半分は行きますからね。

—— 失礼ながらざっくばらんにお話しをさせていただきたいんですけど、今、同朋会館では一泊二日の研修が多いですよ。で、後期教習に行かせていただくと、二泊三日はなかなかきつという声も聞きながら。でもやっぱり二泊三日一緒に生活したなりなのが、何か残っていくっていうか。いろんなものを感じて、出てこられるんですけど。やっぱり一泊二日となると、何かずっと素通りしていくような、格好になっていきますよね。

会館教導に行ってた時、一泊二日、これはコンビニ奉仕団と教導さん同士で話した事を思い出しますね。24時間。冗談でそう言っていましたかね。一泊二日では何を一緒に考えたらいいか。ただ、そういう形でしか参加出来ない状況で奉仕団を結成したと云う事なら、教導さんにも大きな課題が突きつけられていると云う事ですね。蓬茨先生から、講師の信心が問題だと言われた事が思い出されます。

—— ただやっぱり、二泊三日で後期教習をやっていくような雰囲気はちょっとずつ消えかけていくような感じが今、ありませんか。そんな感じがしませんかね？

ただ、光臺寺さんとの二ヶ寺二泊三日で研修を受けるという意識が徹底していますから。

—— その辺が、例えば本山参り。手を合わせて帰敬式だけ受けましょう、っていうような格好で行く奉仕団もありますし、やっぱり二泊三日に重きを置きたいですし、その意味は十分わかるんですけども、北海道から二泊三日、本山に入っていくということが大変ですし、きついものがあるなという。そこで私自身色々揺れるものがあるんですけど。先生は徹底されて毎年二泊三日、8名毎年っていう。

だけど去年は、当寺の門徒さん、2名だったんですよ。住職と坊守で4名。こういう事はまずないんですけども、直前になって都合が悪くなった人が7名くらい出てきて。光臺寺さんに連絡したら、うちでも呼びかけてみるわと言ってくれたのですが、二週間ぐらい前ですからね。お互いの共同責任として奉仕団が成り立っています。

ふと思い出したんですがね。組で奉仕団を主催していた頃、瑞雲寺さんと生振寺さん、名願寺さんと高德寺さんが二カ寺で毎年、奉仕団を組んでいましてね。よく会館でお会いしましたよ。そしてよく、今年は参加者集めるのに苦労したって。今このような、先に歩まれた人の励ましを受けているなあと感じられました。歩みが生きていますね。

—— (後期教習に)行かれた後の推進員の方々により今でも同朋会は継続され、後期教習にも参加されておられるんですか？

同朋会の会員は毎年交代で二・三名ずつ参加していますね。もうほとんど後期教習は終わっていますから、二回目、三回目と参加しています。

—— 定期的に同朋会に集まられて、先生がお話しされるような形で。(同朋会と後期教習が) ずっと続いているということですね。

同朋会発足の時、先程話しました様に、本廟奉仕を会の行事の一つの目的にしようとなりました時、それでは誰でもが行きやすい様に皆で奉仕作業をして助成金を作ろうよ、という方がいましてね。驚きましたよ。こんな声が出るなんて。そして屋根の雪下ろしに行くとか。田植えの遅い家の手伝いがいいとか、いろんな声がありました。

たまたまお寺の田んぼを作っている人が辞めましてね、お寺に返されたんです。同朋会の方は、それじゃお寺の田んぼを自分たちで作って、後期教習の助成をしようとする事になりましたね。「同朋」の取材に通信員をなさっておられた多田一也氏が見えられましてね。何年か後の事ですが、記事の中で仏供田とっておられました。田は稲を育てるだけでなく、会員の心に仏願を伝え、サンガを育てると感じたのでしょうか。

—— それは何年くらい？

えーと。20年以上続いたんじゃないですかね。

—— 20年以上助成金を、(田んぼの収入で)出せるようにと。

毎年4・5名参加で3万円ですね。同朋会の会員助成は今も続いています。

—— そしたら同朋会の方で田植え、農家の方が多いでしょうから、田植えして、収穫して。収入にして。やっぱり農村ならではのですね。いいですね。面白いですね。初めて聞きました。いまでもその、後期教習に参加された方の世代相続は？

世代相続。そうですね、二代目の方がかなりいますね。親が会に入っていたから、という事で会員になられ、本廟奉仕にも参加してくれていますね。その次はどうなりますかね？

—— 余談ですけど、たまたま J T B の添乗員の T さんが、専門に中岡先生の奉仕団に入られてるという話を聞いていまして。おなじ添乗員さんに入っていたくっていうのもなかなか大事だなと。

添乗員の方も同朋会館に入っただけであれば、有難いですね。まあ、引率者は強く言うべきかも知れません。彼は感話も行った事があります。

—— 本山でその J T B の添乗員の T さんにお会いしたんですよ。そしたら中岡先生からずっと御指名がありましてと聞いていました。添乗員さんも同じ形で一緒に研修を受けられて。一つの旅行に一体感がありますよね。添乗員さんも入っただいて、同じものを全部共有していくと。

そしてやっぱり、それから何日か一緒に旅行するというか、見学する事が大事だと思います。二つの意味がありますね。一つは、聞いても出ない事がふっと出るんですね。その事から話し合えるという……。聞いて出るのは意識して出すと云う事ですね。無意識にふっと出るんですよ。ガイドさんの話をバスの中で聞いている時、今、教習で聞いてきた事と違いますよねとか、何か思い出した様に講師の法話の比喻とか……。

もう一つは参加者の生活にふれるというか。ニカ寺の課題。お寺と御門徒の接点が薄れていく現実で、御門徒にお寺が自分達にとっての存在意味を感じていただくと云う事は、寝食を共にする事も一つの方法であろうと……。

—— 先生が後期教習に行かれたのは、おいくつぐらいの時からですか？関わられたっていうか、引率っていうか、参加というか。

私自身が本廟奉仕に参加したのは、組が主催する事になってからですね。それからはずっと。2年間坊守に行ってもらった以外は。それまでは駐在さんの引率で、同朋会の会員の参加ですね。

—— それは教区の？後期教習奉仕団の場合は、駐在さんが引率っていう？

そうですね。ちょっと(資料の)年表に書いてあるかもしれませんが。あっ、昭和56年からですね。5組で行きだしたのは。それまでは教区ですね。

—— 同朋会運動は昭和37年からですよ。その頃からもう既に、後期教習自体は北海道内ではスタートしていたんでしょうか？

そうですね。最初は38年か9年、それくらいに行ってるはずですね。

—— そうですね。中岡先生の所でも当初からずっと。

いや、うちはもう少し後じゃないかな。当時のセンターで既に推進員研修会が行われていたんですから。ただ、最初は一人か二人ですね。資料のこのへんに大体、さっと書いてありますね。

—— こういう資料も全部、残してあるんですか？先生ご自身で。

私のところには整理されていないものはありますけども。これ、整理して最初に同朋会を呼びかけた方が書いてくれたんです。

—— 昭和40年頃からずっと今まで。そこでお伺いしたいんですが、これまでその本廟奉仕と後期教習を続けてこられる中で、一寺院としてどのような動きや交わりが生まれてきましたか？同朋会が生まれた、それ以外で。

奉仕団で研修の最後に、帰りましてからどう歩み出しますかと云う事を、協議する時間がありますよね。そこで、まずみんな必ず自分のお寺の御正忌にお参りしましょう、という事を御約束していただくのです。自分が聞法すると云う事を確認する意味でね。一日はだいたいお参りして下さいませ。あまりお寺に来なかった人にも、聞法の縁となっていたきたいと云う事を願いとしてね。

それから光臺寺さんと二ヶ寺で、「参加者の集い」という聞法会を、12月に光臺寺さんで、7月に敬徳寺で開いています。12月には、帰敬式を受け法名をいただいてきますから、法名と云う事の意味を中心に考えます。それから一人ひとりの法名の名にかけられた仏の願いと云う事で。光臺寺の住職さんがビデオを撮ってくれているので、それと一緒に見ながら、奉仕の参加を振り返るといふ、一日研修ですね。法話は今のところ、私が担当しています。

—— 行った後の交わりを、二ヶ所で持つということですね。先生のお寺では何を？

この時の法話は言葉には出していませんけれども「おのおの十余ヶ国のさかいを越えて・・・」を背景におきながら話しています。自分が本廟奉仕に行ったのは何のためだったのだろうか。私の本当の願いは何だろうか。その事を誰に尋ねたらいいのだろうか。まあ、本廟奉仕にお誘いする時に語りあわなければならない事が、真宗本廟という念仏の歴史にふれて、それを問い返した後、やっと語れる様に感じていますよ。午前中は法話。午後からはサクランボ狩りをしながら、ジンギスカンでお互いの触れ合いを大事にするという内容です。

それから後期教習を担当していただいた、熊本の竹下先生に三年後、報恩講に足を運んでいただきました。参加された人はもう一度、同朋会館を思い出しながら、聴聞しておられました。先生も心に残っている課題を尋ねながら御法話下さった、と話しておられました。

私も、会館教導をお引き受けしていた時ですから3・4年前ですかね。東京教区の後期教習を担当しました。1年後に、東京教区の「推進員の集い」に御縁をいただきました。同朋会館で出遇った方がかなり参加しておられましてね。一人ひとり顔を見ているうちに、尋ねられた事や問いかけた事が見えてくるんですよ。課題が参加者の目や顔から問われ、問題をお互いに深める事が出来た事があります。

—— そういう意味では後期教習、まあいろんな形を含めていろんな講師の先生と、何らかの交わりを持っていくっていうことが大事なことですね。

まあそう云う事からいえば、教区も前期・後期・新生推進員の集いも、同じ方をお願いするのも……。ただ、いろんな先生をお願いするのがいいという御意見もあるでしょうし。問題は私見じゃなく、その方法で何が生み出されていくかを問う事でしょう。

—— この後のもう一つ、毎年本廟奉仕と後期教習に参加者を募るということは大変なことであると思いますが、その中で大切にされていることがありましたら。

やはり本廟奉仕と云う事を基として、御門徒の方と語り合えると云う事でしょうね。もし本廟奉仕を行っていなかったら、その趣旨を伝える事もないでしょう。こちらも問われているんですよ。どう問いかけるかと云う事を機に応じてというか。譬えばあまりお参りに来ない方に「おのおの十余ヶ国のさかいを越えて・・・」等と言っても通じないでしょう。どう語り合うか、これが難しいですね。相手に響く言葉を自分の中で尋ねていくと云う……。そう云う事を大事にしていく事ですね。秋山君も言ってましたが、参加されなくても本当に語り合えたら、参加したと同じ意味があると。呼びかけは一对一。願いを伝える会話ですから。

—— 参加される、されないに係わらず、その人に対して自分の願いを表現するっていう。

どこで願いを表現出来るかと云う事が大事なんでしょう。

—— たとえば20代・30代の僧分が、御門徒さんとの交わりがある程度、お寺で年数重ねてきた場合は話しかけやすいものもありますが、その一步踏み出すきっかけというものがないと、なかなか難しいと思うんです。先生ご自身の体験として何か、よし、踏み出していこうというような体験とかは？

皆、出来ればやりたいとは思っているでしょうね。日常の門徒さんとの対話を大事にする事です。よくこの間、東本願寺にお参りしてきましたとか、言ってくれる方がいるでしょう。こういう方は、今度私と一緒に行きましょう、と何度か語り合えば、参加する可能性は高いですよ。

—— そういう意味では推進員教習とあと同朋会、報恩講、御正忌ということが一つの何かこう円になりながら、ずーっと相続しながら続いてきているという格好なんではないか。形としては。

形としては。ただ、なかなか人数はねえ、集まりませんよ。報恩講なんかですと。

—— あとですね、生み出された推進員が活動していく場はどのようにあるべきだとお考えですか。推進員のアフターの活動の場ということでお聞かせいただきたいんですけども、教区という部分と組という部分と、あと一ヶ寺の寺院というこの3つの視点で、思いを語っていただければと思うんですけど。

教区は大きなテーマというか、推進員共通のテーマで考える事ですね。参加者に御真影の前で誓った宣誓文を確かめて来てくださいという様な。全推進員に呼びかける様なことで、講師の講題もその事で。そこから推進員の出遇いと歩みが生まれるんじゃないかと。そして、組は寺院で出来ない事をやるというように、例えば一ヶ寺で推進員の集いが持てないお寺は二ヶ寺、三ヶ寺と一緒にやる。そして何ヶ寺が合同の同朋の会が生まれてくれる事を願いますね。一ヶ寺で同朋の会が持てるお寺は、そこでやればいい。いろんな形で同朋の会が生まれてくれる事を願いますね。共同教化と云う事は、それを願われればお手伝いする事ですよね。自分の分限において。そして、それが一ヶ寺一ヶ寺の同朋の会が生まれていく事を願って。

だから本廟奉仕も最初の頃は、寺院奉仕団という方が多かったですよ。私、会館に30年位お手伝いさせていただいたんですけどね。何かこう、自分の所に同朋の会を生み出

していただき、お育ていただいたってということで、お手伝いさせていただいたんですけれども、初めは寺院奉仕団の方が多かったですね。ところがだんだん寺院でなくて、組や教区の奉仕団が多くなってきた。寺院奉仕団が理想だと思うんですけど。何か分からないが、響き合うというか、共感出来るものを感じましたね。無論、全部そうだというのではないが・・・。

—— 寺院奉仕団が多かった中で、組の奉仕団とか教区の奉仕団が多くなってきたその理由は何なのでしょう？

寺院で組めなくなってきたんじゃないですか。

—— 寺院で組めなくなったってことは、どういう状況なのでしょう。例えば、人が集まりにくいという問題もあるかもしれませんが。ちょっと逃げた感覚からしますと、一ヶ寺で行った場合ですけど、アフターも含めて行った住職や若さんが、責任を持って関わっていくということまでやっていくということになると、研修にしてもいわゆる自ら法話をしながら一緒に教えを聞いていくまで、一ヶ寺帰結していかなければいけないような感覚に襲われていきますよね。そこから逃げるという意味で何ヶ寺か、もしくは組で行っての方が、一ヶ寺の僧侶としては気持ち楽なんじゃないかっていうような場合。ほんとに人数が集まらなくてという意味も含めて、いろんな原因が考えられると思うんですが。その所はどう感じられますか？

状況でいえば、最初に申しました様に、寺院の存在意味が今よりも深かったから、呼びかければ集まったと云う事なんだろうが、やはりそれだけではない。住職、育成員の意欲でしょうね。

—— それはやはり当時、いわゆる最初にいわれました御命日の法座や、そのなかでも法務を務めるという事が当時の現状で、教えというものを聞きながら人々の生き方や生活に、教えが答えていくような、そういう教えになってないとか、教学が現代の問題に答えていないというような危機意識の中から、そういう問題が派生されたっていう。そういう問題が表現されたってことだろうと思います。けれども今の現状ですと、お寺の存在意義という点で、その当時各住職さんが、同朋会運動が始まる中、心意気というか、意欲が北海道の中で色んな様相で伝播したということから始まるという認識でよろしいんでしょうか。

やはり奉仕団を引率していかれた住職さんからは、皆どこかに共に聞いていこうという清浄な意欲を感じさせられましたね。全部が全部とはいませんが。

—— その意欲の中で、それぞれの住職の意欲という形でいろんな形が表現されてきたっ
ていうことですね。今の寺の現状を見ていくと、住職の意欲、そこに生きる若さん
の意欲ということでは、どうお感じになっていますかね？先生ご自身。

なかなか、集めることは困難じゃないですかね。奉仕団だけじゃない、御座の参詣もね。
これをどう受けとめるかですね。危機意識というのは、同朋会運動を興した人から問いか
けられているんでしょう。学習会と研修会は昔よりはるかに持っている。そこからでてい
く様な歩みが、一人ひとりの上に問われているのでしょう。

—— 教区教化の話になるんですが、推進員の研修、教区の推進員の研修について先生
のお感じになられることをお聞きしたいんですけども。考え方がいくつかありまして、
推進員に関する教区の教化としては、推進員の集まる場所も必要だけれども、推進員
に声をかけていく育成員の情熱、意欲をもう一度高めていくために教区としては、推
進員を生み出す育成員の研修をメインに置くというか、育成員がもう一度一緒に教え
を聞いていく意欲を持っていくような、そういうものに教区教化の重きを置いていく
という意見も、本部の中ではあるんです。そういう点についてはどうお考えになられ
ますか？つまり門徒さんに対する研修会を広く教区として打つのではなくて、育成員
自体にこう特化したものを、推進員の教区教化という部分でも打っていくという。

それなら、若手育成員とそれから推進員で、若手育成員スタッフが参加するのに、必ず
御門徒一人連れてくるという。そういう形がいいと感じています。連れてくる、呼びかけ
た時の問題が、そのまま研修を持つ課題というか、テーマになるでしょう。

—— いまお聞きしまして、例えば組の研修会にしても教区の研修会にしても、組の担当
として育成員が関わる時に、研修会の企画側とスタッフ側で参加者を必ず連れてくる
ということが、一つのスタッフとしての仕事なんだという意識があまりないというか、
ほとんどないような形になってますよね。研修会を企画して、各寺院に募集をかけて、
御門徒さんに来ていただくというお客さんを待つような状態。でも、スタッフ自身
が一人関わる中に連れていくというような、意識はとても大切な問題ですね？

だから研修会を企画する時に、自分がこういう企画をして人を連れて行けるかどうかと
云う事をたずねてくるところから始まらないと、と思いますよ。昔CMに、”あなた作る人、私
食べる人” っていうのがあったが。作った人は食べないと味は分からない。これは研修会
の危機ですね。同朋会運動が特伝という形をとった願いは、講師もスタッフも参加者も
共に聞いていくと云う事で、今日の在り方に問いかけているんじゃないですか。

—— 次に育成員と推進員との交わりということで、願いや今後の歩むべき方向性など、補足というか。

まあ、補足しますとね。スタッフは御門徒を連れていく。その中から生じた問題を、研修会のテーマと課題として学ぶのでしょう。で、講師をお願いする。出来れば講師にも、同じ事をお願いして見るんですよ。先生もこの問題を御門徒の中から聞いて下さいと。怒られるかもしれませんがね。特伝で講師と参加者の間に深い溝があったと云う事が、その事を教えてくれるんです。

一寸、推進員部会と、同朋会運動の原点を考えたいと云う事で御縁をいただいたんですがね、そこで部会の方々のレポートを拝見させていただいたんです。皆さんの同朋会運動とどう取り組むのかという姿勢ですが、よく受けとめられていると感じられました。私があの年の頃は……。しかし、会議になると若い方々の発言は、非常に少ないんです。話すのは推進員の代表者が大半で。まあ、それでもいいんでしょうが、周囲に話しかけるとか、何かを伝え共感しようとする事が、あまり感じられないんですよ。座談なんかでも、自分の自慢話しに終わるといふのを、どこで切るかというのが司会者の難しいところ。

—— 座談という話しが生まれて。司会をする我々にしても、参加する参加者の皆さんにしても、座談が一番嫌だというか……。

皆、そうですよ。何故でしょうかね？

—— いやだというか。一番しんどい時間だといわれます。けども、何か大事にしなきゃいけないものというのは……。

ああ、座談で一番大事にしなければならないのは。私達、育成員の業として、教化者意識があるんですよ。例えば一番皆さんおっしゃるのは、今、先生のお話して何か御質問ないでしょうか。ある訳ないですよ。自分は今、どう聞いて何を感じたかって話しかければいいんじゃないですか。自分は何を聞き、奉仕団の方はどう受け止めているだろうか、と自分のへの問いかけが出来るということでしょう。共感というのは、それと私の答えをもっている。そこから始まるから……。まあ、うなずいていただきたいと云う事と、説得しようというのは方向が違いますね。

—— それでは教学の研鑽と法話について、お聞かせ願いたいとおもうんですけど。現在同朋会運動発足してからたくさんの研修会、教区にありまして、北海道の教研ということも一つそういった願いから生み出されてきたということ、うかがわせていただいています。いま現在は、教学を学ぶ場としては多くの場が開かれておりますけれども、

同朋会運動の発足当時、どういう教学の研鑽の場というものがあって、それがどういう形で立ち上がってきたということと、教学を学ぶという時の若い僧侶の皆さんの雰囲気とか、その中に交わる中での一つの心の変化、熱の変化っていうか。そういうものを具体的に先生の御自身の体験の中でお話しいただきたいなという風に思います。

私が卒業してきた当時は、北海道教区の研修会は2つ思い出されます。教学研修会っていうのが一つありましてね。それからもう一つは東西、お西さんと一緒に東西合同研修会って、この2つですね。あと、寺澤さんのお父さんもお骨折りいただいたんですけど大地の会、あれがいまだに続いているんですよ。ただ大地の会はその当時、参加費が一人5千円だったんですよ。お葬式のお布施が大体5千円でしたから。だいたい。白井さん、加藤さん、寺永さん。そして山本さんや秋山さんが会を生み出してきたんです。発起させた方が不足した費用をまかなうという。何か僧伽を生み出そうという願いが感じられました。元氏先生は一人残りまして、何度も会を伝承しようと、次の世代の世話人を支えてくれましたね。これが一番充実した研修会でしたね。最初参加した時『論註』を宮城先生に読んでいただいた事が強く残っています。何が残っているかといいますとね、よくこんなに深く問題を考えるなあ、と。今迄教えられた事のない視点を聞かされまして、驚いた事を覚えています。その後、西山先生が一年、そしてあと仲野先生がずっと『論註』を読んでもらいました。

私達参加者の意識はどの程度だったかといいますとね。宮城先生が、「キリスト教の牧師で聖書を持ってこない人はいないけども、真宗のお寺さんは聖典持ってこない人がほとんどだ。」そういう教団の現実を悲しみながら、見捨てる事なく、教典に現実を問い語りかけて下さった事を感じていますね。だから、先生は私達に御講義の中で常に真宗聖典の何頁と。親切に話されたと思っていましたが、何か仏語に聞けという叫びの様なものを、今は感じていますね。北海道大地の会は、京都の大地の会において聴聞された方々が我々の地で皆で聞いていく場が欲しいという、大きなうながしを受けた処から生み出された会ではないでしょうか。呼びかけはハガキ一枚ですけど何か、そういう願いが全道の寺院に発信されていったんでしょう。

—— そういう大地の会等々の数少ない研修会の中で、先生方が語られる言葉とか教えを受け止め、表現を聞かれていろんな形で心揺り動かされて学ぶ意欲が湧いてきたというか。皆さんそういう形で受け止められた方が多かったですかね？熱を帯びるといいうか。

ああ、大地の会にきておられる方は、そういう方が多かったですよね。

—— それ以外は例えば仲間内で、例えば何かの会というか輪読するような場所を作ると

か、そういうものが発生していくということはありませんか？

ああ、そうですね。それからしばらくしてから、5組と6組の若手の会が出来まして、歎異抄を読みましたね。

—— 具体的に学習の場がたくさん立ち上がってくるというのは、どのくらいの時期からなんですかね？

やっぱり教研が出来てから教研で学んだ人達が、自分達の学習会をもって多くなったんじゃないですか。ただ、親しい人だけの会はセクト化してく事ですよ。これは人間の業というか、必然ですよ。

—— セクト化の具体的な中身というと？

やっぱり他の人が入ってこれないって云う事じゃないですかね。別に拒否している訳じゃないんですけどね。当時の同朋会にもそういう一面が……。先程の大地の会なんか、ハガキ一枚でしょう。どこに違いがあるんでしょうね。

—— 大地の会に長年こられてる年配の先生方があるときおっしゃってました。「ほんとに知らない若い人がだいぶ増えたなって」。ほんとにはがき一枚でなんとなくみんなが集まるってということですかね。

そうですね、それがいいですよ。入出二門という。誰かの御言葉にありましたよね。「目ある者は見よ。耳ある者は聞け」って。あのハガキはそんな感じですね。教区の研修案内はどうでしょうか。言葉でいえるんですけど何かがね……。

—— セクト化ということで。そういう会にたずさわられたり、教研にたずさわられた方が仲間として交わる。知らず知らずのうちに気付かないうちにセクト化してしまうこともあるかもしれませんね。また、例えばいろんなものをやっていく時のメンバー、教区の教化本部自体もそうですよね。知り合いとか。仲間になると何かそういう御縁のない人が入りにくくなっていくというものが多々ありますよね。そう考えると、教区全体、470ヶ寺ある中で、それぞれの現場を抱えておられる人たちが、セクト化を超えて何か一つのものを共有しながらやっていくという事は、なかなか困難になっていきますね。

まあ、状況的に難しいですね。法縁をいただいても感じるでしょう。聴聞の場の響きと

どうか、同じ法話をしましてもね。違うでしょう。お寺によって。我々の一つの物差しでしか測る事が出来ないから、そこに身をおいている育成員の方の声を聞き、受け止める事でしょうね。受け止めると云う事は自分に気づかない環境があったと。これがね、我々仲間の話でも、そうか、それに比べれば（俺の所は）まだましだと。案外そういう話しって多いでしょう。その環境を教えに問うというか。まあそれが共感でしょうか。

—— もうひとつ現在の我々僧侶の部分で、**教学の研鑽の場の持ち方とか。課題や思いついていうか。何を大事にして教学に学んでいくのかっていうことの一つの思い。若い僧侶のために、教学を学ぶということはどういうことなんだろうかっていう、先生自身の思いを率直にお聞かせいただきたいのですが。**

先程お話ししたことですけれども、一つは現実の問題は横に置いてアトリエに入るんだという先生の御言葉、聖典の言葉というのは生きた言葉というか、問いかけでしょう。この言葉にまでなった先達の歩みを聞く事だと思います。学習会、教学の研鑽はこれに当たると思います。それと共に私の感じるもう一つのアトリエ。これは日常の出遇い、お参りしている人の言葉をもう一度問い返す事ですね。話しが分からんと言われれば、私は何を伝えようとしたのかと。あるいは誤解してまったく違う感じで受け止められた場合にもやはり、自分がその事をもう一度聖典に向かうことでしょう。それが出来るか出来ないかで、アトリエに入っているかどうかという・・・。

あるいは社会に問うと云う事になると、例えば道新の卓上四季とか、それから朝日の天声人語、ああいうのを読んでそこから聖典の言葉でも先生の言葉でも思い浮かんだら、そこから考えて見ることが出来れば、と思いますね。

—— この度の御遠忌は東日本大震災など、皆さんいろいろな状況の中でお勤めしたんですけれども、先生にとって御遠忌を迎えお勤めされる中で、何か思いがございましたらお聞かせ願いたいんですけど。

やはりこう、何か50年前の学生の頃、700回御遠忌がつとまった時には、京都の町全体が御遠忌だ、そういう空気が流れていましたけれど、空気が何か、本願寺の中に閉じこもってるんじゃないかなと感じましたね。お西さんもお参りしてきましたけど、お西さんの方がまだ、外にこう、お参りだよっていう空気が。やっぱり空気っていうのは大事なことだと思うんですね。これ、さっきから話してますように推進員の方が本願寺へ行ってくれるっていうのは、空気。歩んだ人が伝えてきた空気なんでしょう。御遠忌の空気が街に流れない。いろんな事があるんでしょう。合理化してやっているというか、昔はバスでなくて列車で降りて、それから東本願寺まで歩いて行ったり、そして旅館まで歩いて行ったり、一生に一度の御遠忌のために田舎からお参りに来たんだという感動があったん

でしょうね。感動が空気となって街全体に・・・。

—— 何かその空気感ということでお話しただいて。昔、地方から行く人にとってはほんとに一生に一度の本山参りというような形で、一生に一度の長旅という方も多分おられたと思うんですね。そういう中で、各お寺に雰囲気が出来、御遠忌をお参りされたということですね。時代が変わりまして、旅行にもたくさん行かれてる方もおられますし、団体行動もなかなか窮屈な。そういう一人ひとりの感覚の中で、そういう空気感を作るのに教区で、宿所伝道という形で表現をしたと思うんです。私も立ち上げから関わった中で、どういう形で700回忌の御遠忌にお参りするような聞法づくりの、一つの旅。その空気感をどういう形で、北海道教区として表現出来るかっていうことが、宿所伝道の一つの願いだったんですけども、宿所伝道についてはどんな感じで受け止められましたか？

私は直接(宿所伝道の時に)行ってませんので。11月に行きましたからね。

—— (御自坊の)御遠忌はこれから勤められるんですか？

まだ、予定が無いですね。これから、どう云う事になるか。

—— もう一点お伺いしたいんですが、当時の同朋会の発足当時の座談の課題でも僧侶の課題でも、信心談義っていうか、そういうことが活発に行われたんですか。

むくというやつですか。

—— そういう雰囲気だったんでしょうか？

この間、教区の推進員部会でもそういう話しが出ましてね。むくとは、どういう意味なんでしょうかね。一皮むけたという表現でしょうね。つまり、初めとその後で信心というか、生き方が違うんですよ。何も厳しくむくだけがむけるんじゃないでしょう。これはたくさん見てきましたね。

先程の蓬茨先生の講師の信心が問題だ、とおっしゃられた言葉から考えてみましょうか。私は最初聞いた時は「その通りだ」という受けとめでしたね。自分が講師じゃないですから。責任の転化で何も変わらない。先生は講師の方にたえず言われてきたんだろうと思いますが、講師の方がどう受けとめるかですね。そうはいうてもあの参加者じゃねえ、とかいろんな思いがあったり、そう云う事もあるさと流してしまったり。それに対して、この言葉が私の本当のすがたがあの人達に教えられたと感じたら、先生はニコニコしながら厳

しくむいていたんですね。

訓覇先生なんかはかなりきつい・・・、してましたけれども。メモ・ノートが机の上に置いてあるのを見た事があるのです。自分でそれ(その内容に)に対する懺悔の言葉がありましたよね。むくとは曖昧性をどうするかって云う事なんです。この間もあったんですが、話しが長くなるのはそこで止めるように司会者は言わなきゃだめですよと言ったら、それを言うところが悪者になるって。こういうのを自分の曖昧性っていうんでしょう。本来それが問われなければならない。だから、まあまあで話し合う座談になるんでしょう。一人むくんじゃなくって、その問題を共通課題にしていくように、常に問い続ける事が出来るかという・・・。

—— 座談会で司会をさせていただいても、聞く力と表現する力と、自分の中で自信がない人は、相手の顔色を見ながらしか話しを進めていけないという現状が、多くの座談会で多分あると思うんですよ。

いや、私にもありますよ。あの人にあてておけば、しばらく時間は持って大丈夫だっていうのは。こういう時は講師にあてればいいんです。必ず一緒に考える問いを出してくださるでしょう。

—— だからほんとに座談会が率直な語りあいになってこないっていうところで、休憩時間にワッと盛り上がるというのはそういうことなんじゃないかな？

そうなんですよね。だから、長くやればいいのかというもんでもないかもしれないですね。ときどき休みを取るのもいいかもしれないですね。司会者はその間、問う事ですね。自分自身に、参加者と自分に溝がないとか、上から目線になっていないとか・・・。そして休みで話している事をよく自分に尋ねることじゃないかと。

—— 別な話してお伺いしたいんですけども、北海道教区におられた当時駐在だった本田さんにうかがったことなんです。だいぶ昔にいろんな学習会が発行した書籍・講義録を車に積みながら、こういう会でこういう書籍出来ましたということで、紹介しながら本を売ったりしてたっていう。そういうような形でいろんな学習会と交わり持ちながら、いろんな人に情報提供したりということをしてたけども、今は任意の勉強会の数は減ってきましたし、書籍自体を発行し表現していくっていうような学習会があまりないということ、何年も前にお伺いしたんですよ。北海道も今、北3組でやられている、延塚先生の学習会の講義が発刊されているくらいで、たぶん学習会自体のそういった書籍発行とかがないですけども。いろんな講義録の発刊というのはどうでしょうね。大事なことだと僕は思ってるんですが。

ああ、やっぱり大事なことですよね。

—— 編集する人は大変なんでしょうけど。教区でもそんな発刊もしてないですし、一時期、教区の育成員研修会で宮城先生の「信の巻」の講義が1巻2巻、出たぐらいで。教区から講義録自体はあんまり発刊されてませんけれども。

発刊するかどうかは、変な言い方すればあの、あちこちから出てるから結構間に合ってるということもあるんでしょう。ただ学びと云う事なら、何人か一緒にテープを聞き、一人がおこす。問題があったら話し合うとか考えますと、テープおこしも深い学びとなるでしょう。何か今迄なかった学習方法が生み出されるかもしれません。

—— あともう一点、教化本部に携わる中で、具体的な教化の研修施策の中で、教区としての育成員の研鑽の場は教化伝道研修会をメインとしてありますけども、幅広くどんな方でも年代問わずに学んでいく場所ってというのは、教区ではある程度確保していくべきでしょうかね？

聖典に聞く会は必要でしょう。教区全体で。地区じゃなし教区全体で。年齢を問わずして、まあ大地の会のような形で。

—— その場合、どういうお聖教をメインにするとか、どういう形の講師の先生に来ていただくってような、一つの視座を先生がお持ちであれば参考までにお聞かせいただきたい。

何でしょうね。浄土論（註）、観経疏、選択集が宗祖に大きな道を示したんじゃないかと。今、あまりテキストとして使用しなくなりましたが、「現代の聖典」を何故、同朋会運動でテキストとしたのか、問うていくために観経序分義がいいかも知れません。要はそこからどう云う課題を共に学ぼうと呼びかけていく事が大事です。

講師は、私がお聞かせいただいた先生は皆、お浄土に還られましたね。蓬茨先生をはじめ宮城先生……。誰でしょうかね？小泉さんあたりに聞いたらいいんじゃないですか。

—— 何かこう世代、たとえば大学・専修学院出られてすぐの10代の方でも、ずっと歩んでこられた年配の70代・80代の方でも、皆さんが一緒になって学べるような場所を教区でひとつ確保するっていうことが、それぞれの先生方の御住職さん方の一つの歩みや背中を見させていただくことによって。僕も大地の会に参加させてもらった時に、年配の先生方が一番前に座られて、訳分かんないまま一番後ろに座り、先輩方

誠実に学ばれる後ろ姿だけ。講義は最初全然意味わからないんですけども。そういうものがそれこそ空気感ではないんですけども、引っ張られるというか。そういうものが、教区の中で実現できないかなというか。個人的にはそういう学習会があったら嬉しいなという思いがあるんですよ。

一泊二日とか、二泊三日で。

—— ただ二泊三日だと、年配の先生方が参加しづらいというようなものもありますので。

まあ、これは各地から集まっていく人達の事も考えながら、ただ三講はお聞かせいただきたいですね。

—— お聞かせいただきたいことは大体、いまお話し、質問させていただいたような事なんです。最後に若手僧侶に対して、先生からのメッセージが何かございましたら。

先程考えましたような、二つのアトリエに入る事ですよ。御聖教は響きを聞くという事もあるんでしょう。私達もよく言いますね。御門徒の方が正信偈は分からん。現代語したものは・・・と言われた時に、響きを聞きましょうって。

—— お聖教もたとえば先生方のいろんな、いまは宮城先生にしろいろんな先生方の講義録ありますけれど、先にそれを読んでお聖教読むと、そうかと分かったつもり。何も解っていないのにわかったつもりになるんですけど、いわゆる経典をそのまま、白文です。それでこのまますーっと読んでいくと、何の意味、何をいおうとしているか自体が、聞こえてこないことが・・・。

聖典に親しむといいますが難しい事です。先生方の御講義を通して聞くという場合でも、最初に聖典の言葉は出されていますよね。そこを何回か繰り返して読んだ後、先生の御了解を通して聞くと云う事ですよ。そして私の主観では受け取り難い言葉や御了解に出会う事がありますよね。それを曖昧にしたり、読み流したりせずに問い返す事です。これは逆に仏の言葉が私に問いかけている事なのです。それと、白井先生からお聞かせいただいたんですが、分かりやすい先生の御講義等を読む時は、分かったようなつもりになるから気をつけなさいとね。本当の自分自身が問われないという事ですよ。先生を利用するだけだっけ。御説教のネタとして。

—— ありがとうございます。2時間ぐらいのロングインタビューになりましたけど、風邪で体調の悪い中、ありがとうございました。

